

アリストテレスの論理学的著作における『命題論』の位置

高橋 祥吾

1. はじめに

アリストテレスの著作のひとつ『命題論』は、「オルガノン」と呼ばれる論理学的著作のひとつに数え入れられている。この著作は、『カテゴリー論』と『分析論』の間に位置づけられる著作として、伝統的に理解されてきた。

その一方で、この著作は、著作全体の目的や位置づけとは別に、著作のいくつかの箇所、個別の哲学的なテーマを提供してきた。すなわち、第一章の言語の意味作用に関する議論や、第九章の「海戦問題」と呼ばれる未来についての命題をめぐる議論である。

個別のテーマに注目するのではなく、さらに『命題論』を『カテゴリー論』と『分析論』の間に位置づける伝統的見方とは別に、『命題論』を統一的に理解する解釈が Whitaker によって提示されている。それは、『命題論』を『トピカ』や『ソフィスト的論駁』と結びつける解釈である (Whitaker (1996), pp. 2-3; p. 182)。Whitaker の解釈は、『命題論』を、形式化した推論としての *συλλογισμός* (三段論法) や論証ではなく、*διαλεκτική* (δialektikḗ) と結びつけようという解釈である。また別の解釈として、水野有庸が、日常的な言語について論じている著作として『命題論』を解釈している。

本稿では、伝統的な解釈、水野の解釈、Whitaker の解釈を概観し、各解釈の妥当性を検討する。そして、いくつかの点で Whitaker の解釈を支持する。しかし、*διαλεκτική* に関する著作である『トピカ』や見せかけの論駁について論じた『ソフィスト的論駁』と『命

題論』が関係があることは確かであるが、『分析論』において、『命題論』に述べられている命題についての説明が忘れられているわけではない。本稿では、この点を指摘したいと考えている。

2. 著作年代について

はじめに『命題論』の著作の成立時期に関する議論を見ておくことにしたい。というのは、『命題論』の成立時期を確定することは困難であるだろうが、成立時期に関する議論の中には、著作の内容理解に関わる部分が含まれているからである。

さて、『命題論』が書かれたという時期は、大きく分けて二つの可能性が提示されている。ひとつは、比較的早い時期に書かれたであろうとする説である。もうひとつは逆に、かなり後になって書かれたであろうとする説である。後者は、単純に文献学的な見地に基づく。というのは、『命題論』の中では、他の著作について言及されている箇所があり、それらを考慮すると成立年代が遅くなるだろうと考えられるからである。言及されている著作は、『分析論』、『トピカ』、『靈魂論』である。このうち、『分析論』と『トピカ』は比較的早い時期の著作と考えられているが、『靈魂論』はかなり遅い時期の著作と考えられている。そのため、言及されている『靈魂論』よりも後に成立した著作であると考えるならば、かなり遅い時期の著作と見なすことになるのである。また、『命題論』に言及している著作もなく、この点も『命題論』が遅

くに成立したと考える理由となる。

他方で、比較的早い時期の著作とする説は、例えば山本光雄の場合、上記に挙げられた著作への言及はすべて後代の挿入と見る。山本は、『カテゴリー論』と同じくプラトンの対話篇を意識した箇所が見出されることを理由にして、『命題論』が青年期のアカデメイア在学時代の作であると判断している(山本(1971), p. 162)。山本は、別の箇所でも『カテゴリー論』が青年期の作品であり、プラトンの影響を受けていると解釈している(山本(1971), pp. 154-155)。そのため、『命題論』もまた同じように初期の著作に属するというのである。

しかし、この山本の解釈は、彼自身は明確に述べてはいないが、後期にはプラトンからの影響は完全に脱却しているという発展史的な解釈がすでに前提されているように思われる。

また、Bocheński は、syllogismos が形式化してゆく過程が想定され、syllogismos がどの程度形式的であるかに基づいて相対的な位置づけを決めようとしている。彼は『分析論前書』で述べられている形式推論の成立という流れを想定して、文体、様相論理の有無、記号の使用の仕方、形式推論を知っているかどうかという基準によって、相対的な著作順序を決定する(Bocheński (1956), p. 49)。この基準を考慮するとき、『命題論』には、三段論法の理論、変項の概念は見出されないことがわかる。様相の考えが見出されるけれども、『分析論前書』と比べて原始的である。そのような判断から、『トピカ』と『ソフィスト的論駁』という初期の著作の次に位置し、『分析論後書』と同じくらいに書かれたものであるが、『後書』よりは先の著作と判断している(Bocheński (1956), p. 50)。付け加えて言えば、彼は『分析論前書』が最後の著作であると解釈している。少なくとも、『命題論』が『トピカ』と『分析論』の中間に位置するであろうことは確かであると、Bocheński は考えている(Bocheński (1956), p. 51)。

Bocheński の解釈は、形式的な推論が、そうではない推論、つまりディアレクティケーよりも優れているという価値判断を前提しているようにも見える。というのは、Bocheński の解釈

の基準に従えば、『分析論前書』で展開されている推論の形式化が最終的な到達点とならざるをえないからである。推論の形式化の度合いを基準にしてしまえば、『分析論前書』が最後の著作に位置づけられることは避けられないだろう。したがって、Bocheński の相対的な順序は、著作順序そのものというよりも、「オルガノン」相互の位置づけを、推論の形式化という観点から提示したものであると理解する方が適切であろう。

以上を考慮するならば、『命題論』の著作の成立を他の著作と相対的に位置づける場合、いかなる観点に基づくのが決定的な役割を持つことになるだろう。山本のようなプラトンの影響という基準や、Bocheński のような推論の形式化という基準に基づくことで、それぞれ相対的な著作順序が決定しているならば、『命題論』の著作の内容を考察することの方がより重要である。そこで以下では、『命題論』の位置づけの諸解釈を見てゆくことにする。

3. 伝統的解釈について

伝統的解釈の代表として、アンモニオスとトマスを挙げて考察することにする¹。まずアンモニオスによれば、『カテゴリー論』は単一の音声についての著作であり、『分析論』は推論についての著作である。そして『命題論』は単一の文についての著作であり、『カテゴリー論』と『分析論』の間に位置づけられることになる。

このことから、語られたことどもに基づいて、著作の配列もまた我々に明らかになる。というのは、単一の文(ἀπλοὶ λόγοι)が単一の音声と推論の中間の位置にあるならば、そして、一方で単一の音声についての考察を『カテゴリー論』が、そして、単一の文についての考察を、前に置かれている著作[『命題論』]が、推論についての考察を『分析論』が伝えるならば、明らかに、[『命題論』は、]『カテゴリー論』と『分析論』の中間の位置になるだろうし、『カテゴリー論』に後続し、その一方で『分析論』と論理学

¹その他の伝統的解釈については、水野がまとめている(水野(1966a), pp. 86-88)。水野はポエティウスを中心にしてまとめている。本稿では水野が挙げたポエティウス以外で、代表的な解釈者と言いうるアンモニオスとトマスを考察することにした。

に関する論考が書き記されたすべてのものより先行しているのである。

(Ammonius, *in De int.* 4. 17-24)

アンモニオスは、「オルガノン」に含まれる著作のそれぞれの内容の相互の関係が、著作の順序に対応していると見なしている。ここでは、『カテゴリー論』を単一の音声についての著作と位置づけて、音声の複合体としての単一な文、そして単一な文の複合体としての推論という関係が示され、著作の順序もそれに沿った形になっているということなのである。

また、トマスの注解では、冒頭で次のように述べられている。

ちょうど哲学者 [アリストテレス] が、『靈魂論』の第三巻で述べているように、知性には二様の働きがある。すなわち、ひとつは、不可分のものの知性認識と言われる働きであり、まさにこの知性の働きによって知性はなんであれ事物の本質をそれ自身のうちで把握するのである。他方のものは、複合したり、分離したりするものを対象とする知性の働きである。そして、第三の働きが加えられる。すなわち、推理するという働きである。それは、勘考能力 (ratio) が、知っているものから知らないものの探求へと進むということに即した働きである。そして、これらの働きのうちで第一番目の働きが、第二番目の働きに対して秩序づけられている。というのは、複合や分離は、単純なものの把握なしには不可能であるからである。また、第二番目の働きは、第三番目の働きに対して秩序づけられている。というのは、何らかの知らないものについて確実なものを受け取るために、知性が賛同する何か真であると認識されたものから進められるべきであることは明らかであるからである。

ところで、論理学は、勘考能力の学知であるから、その論理学の考察が上で述べられた勘考能力の三つの働きに関わっているところのものを対象とすることは必然である。それゆえ、知性の第一番目の働きに関わっているところのものについて、すなわち、単純な知性によって概念把握 (懐念) されるものについて、アリストテレスは、『カテゴリー論』の中で規定している。第二番目の働きに関わるところのものについて、すなわち、肯定的言明と否定的言明については、『命題論』の中で哲学者は規定している。そして、第三番目の働きに関わるところのものについては、『分析論前書』とその後続く著作の中で規定している。これらの著作の中では、単純な推論について、そして推論と議論のさまざまな種類について進められる。それらの

推論によって、勘考能力は、あることから別のことへと進むのである。それゆえに、上述の三つの働きの順序に従って、『カテゴリー論』が『命題論』に秩序づけられ、『命題論』は、『分析論前書』とそれに続く著作に秩序づけられるのである。

(Thomas, *in De int.* p. 5, n.1-2)

トマスの場合も、伝えられている著作の順番に応じた、著作の順序の説明という点では、アンモニオスと同じである。ただ、知性の働きという点から説明を試みているという点が異なる。ただし、知性の働きを言語と対応させてみれば、アンモニオスの説明と大差がないとも言えるだろう。

以上のように伝統的には、『命題論』の位置づけは、「ローマ帝政期以降におけるオルガノン諸書の配列順序の権威」²に影響されているように見える。これらの伝統的解釈は、著作の順序に影響されて、それぞれの著作を強引に関係づけているようにも思われるが、語について、文について、推論についてと、それぞれ目的を別にした著作があるのだという見方はそれほど不自然ではないようにも見えるのである。

4. 水野有庸の解釈

水野による解釈は、伝統的な解釈に対抗したものである。伝統的な解釈においても、この後に見る Whitaker の解釈においても、『命題論』は「オルガノン」の他の著作と関連付けられている。しかし、水野の解釈は、まず他の著作との関連を重視せず、そして『命題論』のテーマは λόγος の「日常的性格」だと主張する (水野 (1966a), p. 93)。したがって、この著作の書名は「日常の言葉によるものごとの開示について」とするべきであると、水野は考えている (水野 (1966a), p. 102)。

水野による伝統的解釈の批判の一つは、『カテゴリー論』と『分析論』の間の著作として、位置づけるという考え方に対する批判である。古代からの解釈者たちが、この位置づけに対して無批判であったこと。そして、19世紀から20世紀にかけての解釈者たちは、この位置づけから解放され始めていることを指摘し、『命

²水野 (1966a), p. 87.

命題論』の内容を、この著作それだけで理解しようとしている(水野(1966a), p. 88).

したがって、水野の伝統的解釈に対する批判は、*πρότασις* と *ἀποφαντικός λόγος* の違いを無視していることに向けられることになる。『命題論』が主題として論じているのは、*πρότασις* についてではなく、「純粹論理学のたぐい」ではない(水野(1966a), p. 91)。水野が指摘する理由は二つである。ひとつは、*πρότασις* は *ὄρος* を二つ含んでいて、換位が可能であるが、『命題論』で語られている *ἀποφαντικός λόγος* は、そのような換位を可能とするものとして考えられていないというものである。

水野の解釈の特徴は、『命題論』を論理学的著作として見なさないところにあるだろう。それは、「オルガノン」の他の著作と関連付けることをしないからである。このとき、水野が『命題論』を「オルガノン」の他の著作とは独立に、この著作だけで内容を解釈しようとするのは、伝統的な解釈に対する批判と結びつき、論理学的な見方を拒否することになる。そして、水野の考えるアリストテレスの論理学的な命題は、『分析論』の中で論じられている推論における前提命題としての *πρότασις* である。その結果として、『命題論』第十一章の中で言及される *πρότασις* が『分析論』の *πρότασις* とは異なることが、『命題論』を日常的な言語についての著作と考えることに繋がるのである(水野(1966a), p. 90)。この解釈は、ディアレクティケーにおける *πρότασις* の特徴を見落としてしまっている。それゆえ、水野は次のように言うのである。

勿論、この箇所の *πρότασις* には「論理的な」内容もある。「一対の対立した主張をかたちづくる片方の部分」というのがそれである。*πρότασις* をこの論理的なものとしてのみ解し、さらに *ἀντίφρασις* との関聯をも捨ててみると、そのとき、*συλλογισμός* の出発点、いわゆる「前提」をさしてこの語を用いる下地が準備されることになる。

(水野(1966a), p. 90)

このように、水野は *πρότασις* を主に『分析論』で用いられているそれと考えている。そのため、ディアレクティケーにおける *πρότα-*

σις は考慮していない。水野は見落としているが、ディアレクティケーにおける *πρότασις* は「*ἀντίφρασις* との関聯」を捨ててはいない。水野はアリストテレスがディアレクティケーを批判し、ディアレクティケーから『分析論』の形式推論へと完全に乗り換えてしまったと考えているように見える(水野(1966a), p. 90)。しかし、水野が抱いているであろうこの暗黙の想定は誤りであろう。アリストテレスがディアレクティケーを捨ててしまったと考える理由はなく、『命題論』で想定されている *πρότασις* がディアレクティケーに用いられるものであることから、Whitaker の様な形で『トピカ』や『ソフィスト的論駁』へ結びつけることは不可能ではないのである。

もう少し水野の解釈について吟味して行こう。水野は、伝統的解釈批判として『分析論』との結びつきを断つことにはかなりの程度成功しているように思われる。*ὄνομα* と *ῥῆμα* の関係は、ふたつの *ὄρος* の結びつきとして命題を考える『分析論』の *πρότασις* とは異なることを、水野は正しく指摘している(水野(1966a), pp. 91-92)。

このとき、*λευκόν* や *οὐ δίκαιος* ような *ῥῆμα* の説明をするとき、水野は「文法学以前の水準」が考えられていると述べている(水野(1966a), p. 94)。この *ῥῆμα* についての水野の説明は、Barnes の解釈と同じである³、適切な解釈である。しかし、このような *ῥῆμα* を、「文法学以前の水準」であるとする根拠は明瞭ではない。

しかし、水野の言うような「日常的」な言葉についての著作と考える解釈には困難がある。彼自身が反論として想定しているように、*ἀόριστον ὄνομα* や *ἀόριστον ῥῆμα* は、あまりにも「日常的」ではないだろう。水野自身の弁明は、このような *ἀόριστον ὄνομα* や *ἀόριστον ῥῆμα* が「予備研究的」に説明され、「理論的哲学への入門書として」の『命題論』が用いられたと考えるなら、「教育目的」としてこのような用語が説明されているのだというものである(水野(1966a), pp. 95-96)。しかし、『命題論』を他の著作と関連させずに理解している中で、この *ἀόριστον ὄνομα*

³Barnes(1996), p. 176; p. 180.

とἀόριστον ῥῆμαについて説明するときだけ、他の著作に対する入門的な位置づけを要請するというのは、都合が良すぎる解釈であると言わなければならないだろう。

そして、ἀποφαντικός λόγοςは、肯定と否定の対立関係として第七章以降で説明されているが、この肯定と否定のうち、どちらか一方が必然的に真であることが、ひとつの重要な点である。

しかしそれは、水野が述べるように、「低次元の真偽の水準」に留まっているかもしれない(水野(1966a), p. 101)。というのは、ひとつのものごとに対応する肯定と否定の命題のどちらが、ほんとうに一致して、真であるのかは未定のままだからである。そのため、肯定と否定の命題を問いとして提示し、それに対してどちらかを答えることによって推論を進めるディアレクティケーは、その命題の真理は常に蓋然的なレベルに留まることになる。

そして、このような肯定と否定の関係が成立するのは、「ひとつのものにひとつのもの」を肯定したり、否定することができる場合に限られる。このような否定と肯定の対立関係に、ディアレクティケーは基づいている。この点に着目して『命題論』を『トピカ』や『ソフィスト的論駁』と関連付けるのが、Whitakerである。

5. Whitakerの解釈

以上のような伝統的解釈や水野の解釈と比べると、現代の研究の多くは『命題論』の中に現れる個別の問題を注目していることが多いだろう。例えば、第一章を中心に、言葉と意味と魂の関係を論じたり、第二章以降で、命題の文法的構造を論じたりするのである。その中でも、第九章の未来についての命題に関する決定論の問題、いわゆる「海戦問題」が、『命題論』でもっとも注目されてきた問題であろう。

それに対して、『命題論』を命題の肯定と否定の対立関係について述べた書であるとして、『命題論』全体の主題について積極的に提示したのがWhitakerである。彼は、伝統的な『カテゴリー論』と『分析論』との関係を強調する読み方に対抗して、『トピカ』と『ソフィスト的論

駁』との関係を強調している。実は、『命題論』が『トピカ』や『ソフィスト的論駁』と関係が深いことは、すでにBocheńskiが指摘していたことではあった(Bocheński, p. 48)。しかし、実際に肯定と否定の対立に関する書として、『命題論』の全編に渡って詳細な読みと解釈を提示したという点に、Whitakerの功績があるだろう。

さて実際に、『命題論』の中で、問答法について述べられている箇所がある。Whitakerの解釈の根拠の大きな部分を占める箇所であり、水野も取り上げていた箇所である。

だから、もし問答法で使われる問いが、前提命題への返答であれ、対立関係にある命題の片方の部分への返答であれ、返答の要求であるなら、とはいえ前提命題は対立する言明の一つの部分なのであるが、それ[「ソクラテスは白い歩く人」のような種類の命題を用いた問答法での問い]に対する返答は一つではないだろう。というのは、質問も一つではなく、答えも、仮に真であるとしても、一つではないからである。しかし、これらについては『トピカ』の中で語られた。そして同時に明らかなのは、「何であるか」も問答法で用いられる問いではないということである。というのも、対立する言明の部分のいずれかを表明しようと選択することが、問いから与えられなければならないからである。そこで、問う人は「人間はこれこれであるか、あるいはそうでないか」と問いを定めなければならないのである。

(De int. 11. 20b22-30)

この言及から我々は、『命題論』の内容が、問答法に有用なものであることを知ることができる。肯定と否定の関係について知ることが、問答法において、問いを作るために必要なことなのである。『トピカ』では、問答法で用いられる問いは、「はい」か「いいえ」で答えられるものでなければならないと言われている。そのような問いを用いることで、もし問答の場面で問い手が答え手によってある問いを否定された場合、答え手の側の主張は、問い手の出した問いの否定であるということになるからである。そして、そのような問いを作るために『命題論』は、基本的な肯定と否定の対立の説明を行い、さらに対立関係が曖昧な例外を排除していくのである。したがって、『命題論』が『トピカ』と連絡する著作であると、Whitakerは主張するの

である。

例えば Whitaker は、『命題論』第八章で語られていることを、『ソフィスト的論駁』や『トピカ』と結びつけている Whitaker(1996), pp. 98-100). 第八章では、ひとつの単語が複数の意味を持つ場合が考察されている。アリストテレスが用いている例は、馬と人間に対して、「衣服」という名が付けられる仮定の場合である。このような単語を使って命題を構成したとしても、適切な肯定と否定の対立関係は成立しない。このような、実際には二つの命題であるが、ひとつの命題に見える場合、先の引用(20b22-30)でアリストテレスが述べているように、問いがひとつではないために、その問いに対する返答もひとつにはならない。したがって、ディアレクティケーで用いる問いとしては適切でなく、その問いを作るための命題もまたディアレクティケーに適切ではないだろう。

Whitaker は、『命題論』の内容を『ソフィスト的論駁』で論じられている「二つの問いをひとつにすることに拠る論過」(SE 5. 167b38-168a16)と結びつけている(Whitaker(1996), p. 100). また Whitaker は、『命題論』20b22-30と『トピカ』157b6-33と結びつける(Whitaker(1996), p. 99).

6. 命題の対立関係と『命題論』

さて、以上のような『命題論』の位置づけに関する諸解釈のなかで、我々はいずれの解釈に近づいて『命題論』を解釈するべきであろうか。Whitaker の解釈では、命題の対立関係が重要な視点である。伝統的な解釈では、形式的推論との繋がりが想定されていた。水野の解釈では、伝統的な解釈が想定しているような見方は根拠がないということであった。

伝統的解釈に対する水野の批判は説得力があるものである。とりわけ、『命題論』では命題が换位可能な二つの名辞(項)として考えられていないという指摘は正しいだろう。この点は Geach によっても指摘されていることである。Geach が指摘するところでは、アリストテレスは、『命題論』において保持していた命題の論理的な構造を、『分析論』においては失っているというのである。

『命題論』における名($\delta\nu\omicron\mu\alpha$)と述べ言葉($\rho\tilde{\eta}\mu\alpha$)から成り立つという命題理解は、プラトンの『ソピステス』(261D-262E)におけるアイデアを受け継いでいる。名と述べ言葉は、それぞれに役割が異なり、名が述べ言葉の代わりになることや、逆に述べ言葉が名の代わりになることは不可能である。Geach のシナリオでは、この名と述べ言葉の複合によってできる命題の論理的構造は、現代の論理学に通じるものであったが、アリストテレスは『分析論』ではこの考えを放棄してしまい、名と述べ言葉の区別から、置換可能な項の概念へと移行してしまったというのである(Geach(1972), p. 47)⁴

Geach や水野が指摘するように、『命題論』と『分析論』の命題に対する見方は、著しく異なるように見える。したがって、水野が考えるような『命題論』では日常的な言葉が考察されているという解釈は採用しがたいが、彼が批判するように、伝統的解釈に従って『命題論』を『分析論』と結びつけるようなことは、安易に主張すべきではないだろう。

それに対して、命題を名と述べ言葉によって構成されるものとして考えることは、命題の対立関係を考察する上で有効である。アリストテレスが述べ言葉なしには肯定も否定もないと言う(*De int.* 10. 19b12). このことは、名と述べ言葉のうち、述べ言葉に注目することが、肯定と否定を成立させるために重要であることを示しているであろうし、命題を名と述べ言葉の複合として理解することの重要性を示しているだろう。アリストテレスがこの発言をしている第十章は、名と $\acute{\alpha}\omicron\rho\iota\sigma\tau\omicron\nu\ \delta\nu\omicron\mu\alpha$ 不定の名の区別、そして述べ言葉と $\acute{\alpha}\omicron\rho\iota\sigma\tau\omicron\nu\ \rho\tilde{\eta}\mu\alpha$ (不定の述べ言葉)の区別に基づいて、命題の対立関係が例を交えて説明されている。第二章と第三章で事前に $\acute{\alpha}\omicron\rho\iota\sigma\tau\omicron\nu\ \delta\nu\omicron\mu\alpha$ と $\acute{\alpha}\omicron\rho\iota\sigma\tau\omicron\nu\ \rho\tilde{\eta}\mu\alpha$ を提示していたのは、命題の対立を適切に構築するために必要なことだったのである。

したがって、我々は命題の対立関係に着目し

⁴このような Geach の筋書きは、Barnes がフレーゲとアリストテレスの比較を通じて批判している。とりわけ、フレーゲの場合には可能である複数の項を持つ述語が、アリストテレスの場合は困難であることを指摘している(Barnes(1996), pp. 197-200).

て『命題論』全体を解釈する Whitaker の解釈に近づくべきであろう。そして Whitaker の主張するように、ディアレクティケーとの関連で、著作としては『トピカ』や『ソフィスト的論駁』との関係を重視すべきであると思われるのである。

しかし、ひとつ注意すべき点がある。それは『分析論』においてアリストテレスは命題を、ひとつのことに對して、ひとつのことを肯定したり、否定したりするものだと考えているという点である。「前提命題とは、何かについて何かの肯定的な文、あるいは否定的な文である。(APr. A 1. 24a16-17)」と、アリストテレスが『分析論前書』の中で言うとき、『命題論』第六章(17a25-26)で肯定が「何かについて何かを(τὶ κατὰ τινός)」言明する文(ἀπόφανσις)であり、否定は「何かから何かを(τὶ ἀπὸ τινός)」切り離して言明する文と述べられてることと繋がっていると考えるべきであろう。さらに『分析論後書』第一巻第二章では、次のように言われている。

そして、前提命題とは、対立する言明⁵の片方の部分であり、ひとつのものについてひとつのものを主張している。そして、問答法的な前提命題は、どちらであれ同じように受け入れているものであり、他方で論証的な前提は、片方を

⁵72a8-9 は、Barnes や Colli に従って写本の ἀποφάνσεως ではなく、ἀντιφάσεως で読む (Barnes(1993), p. 3; p. 98. Colli (2003), p. 281; pp. 894-895.). この箇所をはじめ 72a8-14 全体を整合的に読むことは困難である。もし写本 ἀποφάνσεως のままで「言明の片方の部分」と訳しても、整合的に解釈するためには、「言明」の内容として肯定と否定の対立する二つの命題を想定しなければならぬだろう。それは事実上、Barnes や Colli の読みと同じことである。Detel は、Barnes の解釈には写本の根拠がないために拒否して、写本通り読んでいる。また ἀπόφανσις を Prädikation と訳している (Detel (1993), Anmerkungen, p. 67). 確かに写本を重視し、直後にある ἐν καθ' ἑνός との関係を考えるならば、Detel と同じく、ἀπόφανσις のままにすべきであるかもしれない。しかし少なくとも、Detel のように単に主語と述語の結びつきと理解されてしまうような Prädikation と訳すべきではないだろう。『命題論』の ἀπόφανσις の説明に基づけば、Detel のように訳すことはできないだろう。また、72a13-14 では、τὶ κατὰ τινός κατὰφανσις や τὶ ἀπὸ τινός ἀπόφανσις という表現があるが、『命題論』17a25-26 との一致を考えるならば、κατὰφανσις と ἀπόφανσις の代わりに ἀπόφανσις となる方が良いように思われる。このように、完全な整合性は望めないことから、本稿ではより整合性が高くなるであろう読み方を採用した。

真実であると、定まった仕方では受け入れているものである。そして、言明は、対立する言明のどちらであれ一方の部分のであり、そして対立する言明とは、その間がそれ自身として存在しない対立のことである。他方で、対立する言明の部分は、何かについて何かを肯定する言明か、あるいは何かから何かを否定する言明である。(APst. A 2. 72a8-14)

この箇所は明らかに先に言及した『命題論』17a25-26 と関連すると考えるべきであろう⁶。したがって我々は、『分析論』で語られている前提命題が、『命題論』で語られている命題についての考察の上に成り立っていると考えるべきである。

7. 結論

『命題論』とディアレクティケーとの関連という観点から、『トピカ』や『ソフィスト的論駁』の繋がりを考えることで、アリストテレスは『命題論』において「命題の対立関係」というものを重視し、主題としていたという Whitaker の解釈は妥当であると思われる。命題の対立関係は、ディアレクティケーにとっては、問いを形成するために必要なものであり、論駁にとっては、導き出すべき結論としても重要な意味を持っている。したがって、命題の対立を適切に構築できない場合は、「見せかけの論駁」を生じさせることになってしまう。それは、表現上ひとつの問いが複数の問いを含むという形で生じたり、命題の解釈における結合や分離によって生じたり、あるいは付帯性による誤った推論によって生じることになる。このような「見かけ上の論駁」を生じさせないためには、適切な命題の対立関係の把握が重要となるが、『命題論』においてアリストテレスが採用した手法は、命題の構成要素として名と述べ言葉を考えることで、適切な対立関係を導き出すことであった。そしてまた、命題の対立関係を成立させるために必要なことは、命題が「ひとつのものについてひとつのもの」を主張するものであることである。ひとつの命題は、ひとつの肯定か、ひとつの否定のどちらかである。そして、この「ひ

⁶Barnes (1993), p. 99; Whitaker(1996), p. 79 を参照。Tricot は、第五章 17a20 と第八章 18a13 以下を指示している (Tricot(1938), p. 11, n. 1).

とつものについてひとつのもの」を主張することは、『分析論』においても共通する命題の規定である。したがって、アリストテレスは、命題についての考えを一貫して保ち続けていたと考える方が自然である。『命題論』は、「オルガノン」の諸書に対して関連付けられるものなのである。

• **Primary Text**

Minio-Paluello, L., (1949), *Aristotelis Categoriae et liber De interpretatione*, Oxford Classical Texts, Oxford.

Ross, W. D., (1949), *Aristotle's Prior and Posterior Analytics*, Oxford.

Ross, W. D., (1958), *Aristotelis Topica et Sophistici Elenchi*, Oxford Classical Texts, Oxford.

• **Ancient and Mediaeval Texts**

Ammonius, (1897), *In Aristotelis De Interpretatione Commentarius*, A. Busse (ed.) CIAG IV. 5, Berlin.

Thomas Aquinas, (1964), *In Aristotelis Libros Peri Hermeneias et Posteriorum Analyticorum Expositio*, Torino.

• **Other References**

Ackrill, J. L., (1963), *Aristotle's Categories and De Interpretatione*, Oxford.

Barnes, J., (1993), *Aristotle; Posterior Analytics*, 2nd edition, Oxford.

Detel, W., (1993), *Aristoteles Analytica Posteriora* (Aristoteles Werke in deutscher Übersetzung, 3, II/1, 2), 2 voll., Berlin.

Barnes, J., (1996) "Grammar on Aristotle's Terms", in M. Frede and G. Striker (eds.), *Rationality in Greek Thought*, Oxford, pp. 175-202.

Bocheński, J. M., (1956), *Formale Logik*, München.

Colli, G., (2003), *Aristotele. Organon*, Milano.

Geach, P. T., (1972), 'History of the Corruptions of Logic', in Geach, *Logic Matters*, Berkeley, pp. 44-61.

Tricot, J., (1938), *Aristote : Les Seconds analytiques*, Paris.

Whitaker, C. W. A., (1996), *Aristotle's De interpretatione*, Oxford.

水野有庸. (1966a), 「アリストテレスの ΠΕΡΙ ΕΡΜΗΝΕΙΑΣ : その書題と内容との関係についての試論」, 『西洋古典学研究』14, pp. 86-108.

水野有庸 (訳), (1966b), 『命題論』, 『世界古典文学全集 16』所収, 筑摩書房.

山本光雄 (訳), (1971), 『カテゴリー論』, 『命題論』, 岩波版『アリストテレス全集 1』所収, 岩波書店.

(たかはし しょうご, 広島女学院大学非常勤講師)